

## 日本語条件節における時制性と話者

Tense interpretations and the Speaker Feature  
in Conditional Clauses in Japanese

佐 藤 裕 美

**Abstract**

Among the different types of Japanese conditional protases, those ending with *-ba*, *-tara*, and *-(no)nara* differ not only in finiteness but also in the syntactic and semantic relation to their apodoses. This paper argues that conditional protases introduced by the *-ba* and *-tara* express a condition obtained in an imagined world, while conditional protases introduced by *-(no)nara* express an assumption that the speaker makes based on information available to her. The proposed analysis is different from the previous analyses in which the *-(no)nara* protasis refers to an established fact or a situation that is scheduled or predetermined to be soon realized, and the paper demonstrates that the protases introduced by *-(no)nara* crucially involves the speaker's coordinate feature. It is suggested that having the speaker feature interfacing with the pragmatic information, the *-(no)nara* protasis forms a conditional sentence with syntactic and semantic characteristics that are parallel to those of the 'epistemic conditionals' in English.

キーワード：条件，話者，認識，前提，仮定，時制

## はじめに

日本語条件文の前件である条件節として、「～ば」「～たら」「～なら / のなら」が述語に続く形式がある。例えば、「彼のアドレスを知っていたら教えてください。」や「彼のアドレスを知っていれば教えてください。」の発話が適切な場面と「彼のアドレスを知っているなら教えてください。」が受け入れられる場面は異なっている。後者を発するためには、求める情報を相手がもっていると少なくとも話者が想定できる状況でなければならない。本項では、この違いが具体的にどのようなものであり、何がそれをもたらすのかについての議論を試みる。英語の if p, q の形式の条件文では、条件節の動詞形式によって帰結節と異なる意味的な関係を表すことが知られているが、「～ば」・「～たら」による条件節と「～なら / のなら」による条件節は、時制においての違いがあるだけでなく、発話時における話者の認識が関わるか、あるいは話者のいる現実とは別の仮定世界を表すかの違いがこれらの形式の違いとして文法化されている可能性を指摘する。

## 1. 動詞形態による条件節の違い

条件節において、動詞の時制形式は、表される時と一致しない現象が見られる。反事実的条件文では、条件節の動詞の時制形式が意図される時と一致しない。

- (1) If I had my cellphone here, I would call her right away.
- (2) If it had rained, the match would have been cancelled.

反事実的条件文の条件節では、意図される時を直説法で表す際の時制形式よりも、過去の方に繰り下がる。(1)のように、現在の事実と異なることを仮定する条件節では、時制が過去時制が用いられ、(2)のように、過去の事実と反する仮定は更に古い過去に後退した過去完了が用いられる<sup>1</sup>。

このような時制後退の現象は、反事実的条件文に限らず、条件節に表される事態の真偽が未定である条件文においても見られ、次の文にあるように、英語では条件節で未来の事態が言及されていても動詞は現在時制の形式が用いられ、未来を表す助動詞 will を用いた (4) は非文とされる<sup>2</sup>。

- (3) If it rains tomorrow, the game will be postponed.
- (4) \*If it will rain tomorrow, the game will be postponed.

しかし、法助動詞 *will* は条件節で全く現われないわけではない。(5) の例のように、*will* が用いられて適格と判断される文もある。さらに興味深い点は、(6) の条件節では、(5) と等しく未来の時を表しているにもかかわらず、(4) と同様、現在時制形式が用いられて未来の時に言及されている点にある。

- (5) If he won't arrive before nine, there is no point in ordering for him.<sup>3</sup>  
(Dancygier 1998: 34 (18))
- (6) If he doesn't arrive before nine, we'll have the meal without him.  
(Dancygier 1998: 34 (19))

上の (5) の条件節では、時制後退と言われる現象がなく、動詞の時制は直説法の主文の場合と同じ形式になっている。表わされる時と時制形式が一致する条件節の例は、未来を表すものに限定されない。

- (7) If it was already four o'clock when he left, he will never make it.  
(Haegeman 2003: 322 (9.a))
- (8) If she is giving the baby a bath, I'll call back later. (Dancygier 1998: 27 (5))
- (9) If I have met him, I didn't recognize him. (Dancygier 1998: 27 (6))

上のそれぞれの文の条件節では、動詞の時制形式と一致して発話時よりも以前、発話時、過去のある時点から発話時までの間の事態について言及されている。動詞の時制形式と表される時が、(3) (6) のように一致していない条件節と、(5) (7) (8) (9) のように一致している条件節があることから、条件節の動詞の形式によって何が表されるか、そしてなぜこのような違いがあるのかについて以下で考察したい。

(5) (6) の条件節では、異なる形式で同じように未来の時が表されているわけではない。(5) の条件節は、彼が9時までには到着しないと予測される可能性を前提として表している。(6) の条件節は、彼が9時までには到着

しないという事態が実際起こったと仮定してそこから予測されることを表している。つまり、法助動詞 *will* を用いて未来の時に言及している (5) の条件節では、発話時において未来に起こり得ると話者に予測されることが前提として示されている。一方、現在時制と同じ形式が用いられている (6) の条件節では、表されている事態が起きているという仮定を提示している。Close (1980) では、この違いについて *assumed future actuality* を表す条件節と *assumed predictability* を表す条件節として指摘している。例えば、(10) は 1977 年の北海での油田掘削装置爆発事故の折、風や潮流によって油膜がどの海岸線の方向に流れて来るかの予測について専門家たちがテレビ番組の中で議論している中での発言の 1 つとして挙げられている。

- (10) If the slick will come as far as Stavanger, then of course I must take precautions on a massive scale. (Close 1980: 103 (10))

(10) はノルウェーの Stavanger まで油膜が到達することが予測し得る場合の話者の結論を表し、Close はこの文脈で *will come* を用いていることは、論理的でまた文法的にも容認されるとしている。*will come* ではなく *comes* が用いられていたとしたら、Stavanger まで油膜が到達する事態が起っている状況を想定した文意となり、帰結節で警戒的措置について言及している点で合理性に欠ける。

類似の例として Close はさらに BBC のリポーターの発言から (11) を挙げている。

- (11) How far the flood of molten rock behind me will spread is anybody's guess. If it will come down to where I am standing now, all these lovely villas are doomed.  
(Close 1980: 103 (11))

リポーターは、自分が立っている場所まで溶岩が迫り来る可能性を前提に、発話時点での見解を述べており、その場所に溶岩が到達した場合に起こり得る事態を表すのとは異なる。

次の文は、クリスマスの 2 週間前にロンドンにある社会福祉センターのドアに掲示されていたポスターからの実際の例とのことだが、2 週間後の

クリスマスの日になった時にもし一人ぼっちだったら…，という意味でないことは主節から明らかだ。この条件節では，発話時点で予測される未来について述べられている事がわかる。

- (12) If you will be alone on Christmas Day, let us know now. (Close 1980: 104)

上で見たように，未だ現実にはなっていない事態に言及する条件節の中で will が用いられるか，現在時制と同じ形式の動詞のみが用いられるかの違いは，前者の場合は，発話時において未来に起こり得る可能性を前提として提示しているが，後者では，話者の現実の発話時とは切り離された仮定の世界で，ある事態が成立することを仮定しており，話者，発話時との関わりにおける違いと捉えることが可能と言える。条件節の動詞が表す時が，その時制形式と一致している (7) (8) (9) についても，条件節が発話時起点で解釈されていると考えられる。

Haegeman (1991) は，このように性質の異なる英語の条件文を 'event conditional' と 'premise conditional' として区別し，後者の条件節の時の解釈は主節である帰結節が表す時から独立していることをはじめ，通常は従属節では起こらない主文現象のいくつかが見られる点において，構造的にも異なることを主張している<sup>4</sup>。Haegeman が指摘するこれらの2つのタイプの条件文は，他の先行研究においては，'predictive conditional' に対して，'epistemic conditional' (Dancygier 1998) ; 'content conditional' に対して，'epistemic conditional' (Sweetser 1984) にほぼ対応すると考えられる。'Premise conditional/epistemic conditional' の条件節が発話時起点で時の解釈がされるのは，帰結節が表す結論がどのように得られたかについて，話者がその思考過程で設定する前提であることと一貫する。その一方で，話者の現実の時とは離れた仮定の世界における条件を表す 'Event conditional/predictive conditional' などの条件節は，発話時を基準とした解釈がされないことが予想される。これらの条件節においては，直説法の時制形式を基準にすると確かに動詞の形式と解釈が一致しないが，動詞は直説法とは異なる仮定法のパラダイムの形式を示していると考えることができよう<sup>5</sup>。

これまで見たように，英語では if 節の動詞形態によって条件節と帰結節

の関わり方が異なる条件文であることが示される。日本語には形式的に異なる条件節が複数あるが、これらの間の違いの一部は英語の条件文に見られる違いに対応するものである可能性について考察する。

## 2. 日本語条件文

### 2.1 条件節の異なるタイプ

日本語条件文の条件節にはいくつかの異なる形式が用いられるが、主な条件形式として、本稿では「ば」、「たら」、「なら / のなら」を取りあげ、これらの違いが何を表すかについて考察する。

- (13) 直子は筆記試験に受ければ、実技試験にもきっと受かるだろう。
- (14) 濃厚接触者と判断されたら、保健所の指示に従って検査を受けてください。
- (15) 愛犬のポチが帰ってくる[ なら / のなら ], 田中さんはあらゆる手を尽くすでしょう。

次の例に見られる「たらば」<sup>7</sup>、「ならば / のならば」では「たら」「なら / のなら」に続いて「ば」が起こり、条件形式を形成していると考えられる。

- (16) 愛犬のポチが帰ってくる[ ならば / のならば ], 田中さんはあらゆる手を尽くすでしょう。
- (17) ? 今年のような経験したことのないような大雨が降ったらば、どう対処するのだろうか。
- (18) 動物園に行ったらば、みんなどこかで見た顔ばかり (「どうぶつえんにいったらば」 もちだいちょう (詩) より)

「たら」「なら / のなら」は、「たらば」「ならば / のならば」から「ば」が脱落した形式として捉えると、それぞれのタイプの条件節の動詞形態は次のように表すことができる。

- (19) a. Vroot+e+ba<sub>cond</sub>  
       b. Vroot+tara (+ba)<sub>cond</sub>  
       c. Vroot+T+[nara/no nara] (+ba)<sub>cond</sub>

「ば」節では、動詞は時制形態素をとらず、動詞語幹+屈折形態素 *e* に接続詞「ば」が続く。「たら」節の *ta* は過去を表す形態素と同音で、「たら」節の動詞の形態は、それぞれの動詞の過去形と同じ形式である。しかし、この場合の *ta* は [-past] の *ru* と交替することではなく、また、(14) のような例で「たら」節が発話時より前の過去の時を表わしていないことから、この *ta* は時制の値をもつ形態素として捉えることは妥当ではない<sup>8</sup>。「たら」の *ta* は *ra(ba)* と共に条件形式を表す機能語として分析する。

(20) 濃厚接触者と判断された。

濃厚接触者と判断される。

(21) \*濃厚接触者と判断されるら、マスク無しで感染者と話をすることはできない。

(cf. 濃厚接触者と判断されるなら、マスク無しで感染者と話をすることはできない。)

「ば」節、「たら」節とは異なり、(19c) にあるように「なら / のなら」節の動詞は時制形式をとる<sup>9</sup>。(15) の条件節の動詞が非過去の *ル* 形であるのに対し、(22) では過去を表す *タ* 形になっている。

(22) 愛犬のポチが帰ってきた「なら / のなら」、田中さんの機嫌も直ったに違いない。

前節で、英語では *if* 条件文は一様ではなく、条件節の解釈における発話時、話者の関わりや条件節と帰結節の関係において *epistemic conditional*, *event conditional* のように異なる種類があることを見た。日本語の (19) の諸形式による条件文にも意味的に異なる種類があることが知られている。

## 2.2 既定性と条件節—有田 (2007)

有田 (2007) は日本語の条件文を予測的条件文、認識的条件文、反事実的条件文に分類し、そのうち、予測的条件文と認識的条件文を既定性における違いに基づき分類している。有田は、非時制節は真偽値が未定の非既定的命題を表すことにより、非時制節である「ば」節、「たら」節を条件

節とする (23)(24) のような文を予測的条件文としている。一方、時制節は既定命題<sup>10</sup>を表すことから、(25)(26) の「なら / のなら」節のように、条件節が既定的で、かつその真偽が話者にとって未知である命題を表すものを認識的条件文としている。

(23) あした雨が降れば、試合は中止になるだろう。(有田 2007: 102 (8))

(24) あした雨が降ったら、試合は中止になるだろう。

(有田 2007: 102 (9))

(25) a. 昨日金一封が [出たなら / 出たのなら], 今日はみんな飲みに行  
くだろう。(有田 2007: 113 (5))

b. 電車で [乗っている / 乗っているのなら], あとでかけ直すよ。

(有田 2007: 113 (9))

(26) 来週の水曜日に [出張するなら / 出張するのなら], 今週中に書類  
を準備しておかなければならない。(有田 2007: 116 (36))

有田は、時制節である「なら / のなら」節は、前件が (25a)(25b) のように真偽が確定している過去や現状についての命題、あるいは、(26) にあるような予定されている事柄のように未来の事態であっても話者が現実世界において成立するのを見込んでいる命題を表すことにより認識的条件文を構成するとしている。「ば」節・「たら」節においては、状態述語か動作性述語の状態形によって既定の事態が表され、(27)(28) のような例も認識的条件文に分類されている<sup>11</sup>。

(27) 昨日金一封が [出ていれば / 出ていたら], 今日はみんな飲みに行  
くだろう。(有田 2007: 114 (17))

(28) 事務所に [いれば / いたら], 電話に出るはずだが。

(有田 2007: 114 (20))

このように、有田の分析のよると、日本語において、認識的条件文と関係づけられるのは専ら前件が仮定する事態の既定性であるため、表 1 に表されるように認識的条件文は「ば」「たら」「なら / のなら」節のいずれによっても可能となる。



表 1

条件節	± Finite	条件文タイプ
「ば」	非時制節	予測的 認識的
「たら」	非時制節	予測的 認識的
「なら / のなら」	時制節	認識的

有田 (2007) のように予測的条件文、認識的条件文の違いが条件節が表す事態の既定性の違いにあると捉えることにより、時制節である「なら / のなら」による条件節は予測的条件文を形成しないことがわかる。しかし、既定の事態に言及することにより「ば」・「たら」・「なら / のなら」節のいずれもが認識的条件文を形成することになるが、それらの間の違いについては議論の余地があると思われる。本稿では、条件節が表す事態の既定性とは別の要因が予測的条件文と認識的条件文のような条件文の違いとなって現れ、これら 2 種類の条件文では、条件節（前件）と帰結節（後件）の意味的、構造的関係が異なること、そして、2 種類の条件文の違いは、一方が「ば」節・「たら」節による予測的条件文、他方が「なら / のなら」節による認識的条件文として、文法化されていることを論じる。

### 3. 日本語の認識的条件文の性質

#### 3.1 条件節と既定性

電話の会話でよく聞かれる次の文においても、「たら」節、「ば」節による (29a) (29b) と「なら / のなら」節による (29c) には違いが認められる。

- (29) a. 忙しかったら、後でかけ直します。  
       b. 忙しければ、後でかけ直します。  
       c. 忙しい [なら / のなら], 後でかけ直します。

上の例では、状態述語によって表される電話の相手の状態は発話時ににおいて真偽が確定しているため、有田の分析では、電話の相手の現実の状況は確定しており、かつそれが話者に未知であることが共通しているため、このような条件文は認識的条件文として分析されている (cf. 有田 2007: 114)。しかし、既定の事態を前件が言及している共通点にかかわらず、(29c) の「なら / のなら」節による条件文は、「たら」節、「ば」節による (29a) (29b) の条件文とは重要な違いがある。

(29ab) は、電話の会話の冒頭、話者が相手のその時の状況を知らない時点で述べることができ、電話を突然受けることになった相手に対する礼儀としての発話の場合もある。(29c) は、電話に出た途端の相手の状況を全く推察できない段階で発することはできない。(29c) が可能なのは、相手が忙しいということを想定し得る場合に発せられ、その想定を前提に申し出をしている。(29a) の「たら」節、(29b) の「ば」節による条件文は、前件が表す条件が満たされる、つまり事態が成り立つ場合に、それにより予想される事態が表されている。条件となっている状況が得られた場合に予測される結果を表す「ば」節・「たら」節の条件文に対し、「なら／のなら」節の条件文では、想定に基づく結論が表される。(29c) の「なら／のなら」節による条件文では、条件節が表す事態を前提として話者が推論、思考した結論が帰結節に表されていると考えられる。つまり、「なら／のなら」節は、話者が結論に至るための前提を提示していることになる。話者は推論の前提となる何らかの情報を状況や対話相手から得ていることが必要なため、上の(29c) は電話での会話の冒頭に発することができない。話者によって想定される前提を表しているわけではない「ば」節「たら」節による条件文にはこの制約は当てはまらないことになる。

未来の真偽未定の事柄についても、「たら」節・「ば」節に対して「なら／のなら」節では前件と後件の関係が上の例と同様に異なっていることが観察される。

(30) A: 田中さんが次期会長に立候補するって本当かな。

B: まさか! あの人が立候補する [なら／のなら], 退会する人が大勢出て来るでしょうよ。

上の対話において、話者Bは、「まさか!」の発言によって示されるように、話者Bは田中氏の立候補を既定が見込まれる事態とは捉えていないことがわかる。しかし、田中氏の立候補を「なら／のなら」節で仮定した条件文によるBの発話は適格と判断できる。上記のBの発言は、田中氏が立候補する事態を仮定すると、退会者が大勢出て来るという事態が結論として推測されると解釈され、したがって、彼の立候補の可能性についてネガティブなメッセージが意図されていると考えるのが妥当であろう。

話者Bが発する条件文が(31)のように「たら」節、「ば」節によるも

のでも可能な対話になる。しかし、この場合、条件節と帰結節の時間関係が異なることが以下の例で示される。

- (31) a. まさか！あの人が立候補したら、退会する人が大勢出て来るでしょうよ。  
 b. まさか！あの人が立候補すれば、退会する人が大勢出て来るでしょうよ。

(31a)(31b) の条件文は、田中氏の立候補が仮に実現した場合に予測されることを表している。つまり、退会者が出ることは、仮定の世界で時間的には田中氏の立候補の後ということになる。上の(30)で表されるのは、田中氏が立候補する可能性について前提として話者が推測した結論であり、退会者の出現は、田中氏が正式に候補者となるよりも以前の可能性もある。つまり、(30)では、「なら」節が表す事態の成立が協会の会員減少の原因になるという解釈ではなく、田中氏の立候補の可能性を前提にした結論は、会員数減少が推測される、という解釈になる。それに対して、(31a)では、その人物が会長に立候補するということが実現することで、協会が会員減少の状況になるというように、「たら」節が表す事態が、帰結節が表す事態を引き起こすといったように、因果関係、時間的順序が表される。(31b)の「ば」節による条件文も(31a)と同様の解釈になる。

(32) では「明日の判決によるけれど」の表現により、条件節で言及されているのは既定の事態ではないことがわかるが、「たら」節・「ば」節と「なら／のなら」節では容認可能性に違いがある。

- (32) a. 明日の判決によるけれど、2年後ここに本当に高層ビルが建つ[なら／のなら]、日陰になる住民は今年中に引っ越すでしょうよ。  
 b. \*明日の判決によるけれど、2年後ここに本当に高層ビルが建ったら、日陰になる住民は今年中に引っ越すでしょうよ。  
 c. \*明日の判決によるけど、2年後、ここに本当に高層ビルが建てば、日陰になる住民は今年中に引っ越すでしょうよ。

上の例では「2年後」、「今年中」の表現により、条件節が2年後の出来事、帰結節がそれ以前に起こりうる事態を表すよう、条件節と帰結節が言及す

る出来事の時間関係が規定されている。(32)で「たら」節・「ば」節の場合は容認されないのに対し、「なら／のなら」節が容認されるのは、規定性における違いではなく、前者が条件節の言及する事態の実現した後に予測されることを表すのに対し、後者は条件節の言及する事態を想定する時点で導き出される判断を述べていることによる、という(31)の場合と同様の説明が可能である。

上で見てきたように、3種類の条件節の中で言及されるのが一様に既定の事態であっても、「ば」節、「たら」節の2つと「なら／のなら」節の間には違いがある。また、「なら／のなら」節は広義の意味でも既定とは言えない未既定の事態を表すことができるが、結果として生じる条件文は「ば」節、「たら」節による条件文とは性質を異にすることがわかる。以上の観察から、既定性の違いによる条件節の違いの記述は十分ではなく、別の要因が条件文の違いに関与していると考えられる。要因としてまず考えられるのは、条件節と帰結節の意味的な関係が「ば」節・「たら」節に対して、「なら／のなら」節では異なっていることが挙げられる。

「なら／のなら」節による条件文では、条件節で話者がありうる状況、起こりうる事態として設定する前提を表し、それに基づいて推測される結論を帰結節で表している。この点は、Sweetser (1984), Haegeman (1991, 2003), Dancygier (1998)ら多数の先行研究において、Epistemic Conditional, Premise Conditional/Peripheral Conditional, Epistemic Conditionalの名称で記述分析されてきた条件文の種類の特徴とも共通している。以下では、「なら／のなら」節においては話者の視点が顕在する点において、「ば」節・「たら」節とは異なることについてさらに考察する。

### 3.2 条件節の時制と時の解釈

動詞が時制形式とならない「ば」節、「たら」節で表されている事態の時の解釈は、主節である帰結節に依存し、主節が表す時に相対した解釈となる。

- (33) a. 直樹は朝早くに家を出れば、試験に間に合うはずだ。  
       b. 直樹は朝早くに家を出れば、試験に間に合ったはずだ。<sup>12</sup>
- (34) a. 招待状を送ったら、真知子は演奏会に来るだろう。  
       b. 招待状を送ったら、真知子は演奏会に来ただろう。

(33) の条件文前件の「ば」節は同一だが、直樹が家を出るのは、(33a) では主節が表す未来の時に先行する未来の時であり、(33b) では、主節が表す過去の時に先行する過去の時と解釈される。(34a)(34b) の「たら」節が表す時についても同様のことが観察される。

「なら」節と「たら」節・「ば」節の対照では、帰結節が発話時の事態を表す場合についても違いが観察される。次の例では、純子が来月昇進試験を受けるかどうかは既定ではないことが文脈において示されている。(ac) の条件節では未来の事柄について言及され、それぞれの帰結節では、発話時の状況についての推測が述べられているが、「なら」節を用いた (35a) のみが適格な文で、「たら」節 (35b)、「ば」節 (35c) による文は可能ではない。

純子はいつ昇進試験を受けるつもりなのかな。

- (35) a. もし来月受けるなら、今頃猛勉強しているだろう。  
       b. \* もし来月受けたら、今頃猛勉強しているだろう。  
       c. \* もし来月受ければ、今頃猛勉強しているだろう。

非時制節の「たら」節と「ば」節は、主節である後件に時の解釈を依存し、これらの節が表す事態は、主節が表す事態より以前に成立していると仮定されなければならない。上の (35b)(35c) では、主節が発話時の状態を表しているが、条件節はそれよりも後の時間を表していることから不適格性が説明される。

(36) の3つの文について、(36a) に対して (36b)(36c) では解釈が異なるのは、条件節と帰結節が表す時の関係の違いに起因すると考えられる。

- (36) a. 内部告発する [ なら / のなら ], 確実な証拠と非難に耐え抜く覚悟が必要だよ。そんな覚悟が君にあるのかな。  
       b. 内部告発したら、確実な証拠と非難に耐え抜く覚悟が必要だよ。そんな覚悟が君にあるのかな。  
       c. ?? 内部告発すれば、確実な証拠と非難に耐え抜く覚悟が必要だよ。そんな覚悟が君にあるのかな。

(36a) の「なら / のなら」節による条件文は、内部告発を実行に移す前

の覚悟について表しているが、その一方、「たら」「ば」節による条件文では、内部告発を実行したことにより予測される事態が表されている。これらのいずれの文においても、内部告発が未実現であることは等しいが、「なら／のなら」節の非過去形の「内部告発する」が発話時を起点とした未来の事態として解釈されるのに対し、(36b)「たら」節・(35c)「ば」節では帰結節の事態が生じる前の出来事を表していなければならない。

以上のことから、時制節である「なら／のなら」節で表される事態の時は主節が表す時には依存せず、条件節の時制により発話時との相対で解釈されることがわかる。条件節と帰結節が表す時はそれぞれが発話時を基準に解釈されるため、「ば」節・「たら」節とは異なり、条件節が表す時が主節の表す時に先行する必要はなく、(37)のように、帰結節の事態が条件節の事態に時間的に先行する文も可能となる。

- (37) ルミは来月アメリカに転勤する [なら／のなら]、今週末は京都の実家で過ごすだろう。

さらに、次の例では、時間の解釈について多義性があり、条件節＞帰結節と帰結節＞条件節のいずれの可能性も認められる。

- (38) 彼が改心する [なら／のなら]、私は彼を許すかもしれない。

(38) においては、彼の改心を期待して、話者が前もって彼を許すという解釈と、許すのは彼が改心した後という解釈のいずれも可能である。

前件を「ば」節・「たら」節にした下の例では、「なら／のなら」節の場合のような多義性はなく、彼の改心が私の許しに先行する解釈のみがある。

- (39) a. 彼が改心すれば、私は彼を許すかもしれない。  
b. 彼が改心したら、私は彼を許すかもしれない。

日本語の動作動詞の非過去形は、未来の時を表すことから、このような非過去形は「なら／のなら」節においては、事態が未来に起こる可能性を表しており、「ば」節・「たら」節に於けるように、未来にその事態が実際に起こることを表しているのではない<sup>13</sup>。

### 3.3 「なら / のなら」節と他の条件節—時制節性を超える違い

「なら / のなら」節による条件文では、条件節の時制形式が主節からは独立して解釈される性質は、§1 であげた英語の epistemic conditionals と共通するが、これは、時制節であるということだけではなく、「なら / のなら」節が主節との構造的な関係が、「ば」節・「たら」節とは異なっていることによる可能性を指摘する。まずは、英語の認識的条件文の次の例と対応する日本語について観察したい。

(40) If he'll be left destitute, I'll change my will. (Palmer 1974: 149)

この文の解釈として Palmer は、(i) 彼が貧窮に陥ってしまうのを避けられるよう、彼のために自分の遺言書を現状から変更する、(ii) 彼が貧窮に貶めるために、自分の遺言書を変更する、の2通りの可能性を挙げている<sup>14</sup>。いずれの解釈においても、he'll be left destitute が表す時は、主節が表す未来の時と同時ではなく、それぞれ主節が表す時とは独立して解釈される。(i) (ii) の状況を日本語で条件文によって表す場合、いずれの解釈も (40) によって表すことができる。

(41) (もし) 彼が貧窮に陥る [なら / のなら], 私は遺言書を書き換えるつもりだ。

日本語では、「なら / のなら」節によって、話者は、彼が貧窮に陥るという想定される可能性を前提に、(彼の利益のため / 彼に不利益をもたらすように) 自分の結論を導き出している。(40) の英文と同様、(41) においても「なら / のなら」節が表す事態は、主節が表す事態と共時的ではなく、主節が表す時とは独立した未来の時を表すことにより、未来についての予測を発話時点で想定している。下の (42) (43) のように、条件節が「ば」節、「たら」節である場合、これらの文が表す意味は、(41) とは異なり、双方において、彼の貧窮が実現することが遺言書の書き換えに先行することを表す。

(42) 彼が貧窮すれば、私は遺言書を書き換えるつもりだ。

(43) 彼が貧窮したら、私は遺言書を書き換えるつもりだ。



「なら / のなら」節による条件文では、条件節の時制が主節である帰結節が表す事態との相対で解釈されず、発話時を基準に解釈される。すでに見たように、「なら / のなら」節では、先行談話の情報など話者による認識に関わる性質が示される点においても「ば」節・「たら」節とは異なっている。

次に、過去に起こった既定の事態についての扱いから考えてみたい。非時制節の「ば」節・「たら」節は、完了形によって主節よりも前に起こった事態を表すことができる。非過去形の場合と異なり、「なら / のなら」節が過去時制の場合、事態がある時点で既に起こった可能性を想定し、その点で「ば」節・「たら」節と共通している。しかし、他の二者とは異なり、「なら / のなら」の場合、話者は文脈や状況上の何らかの根拠により条件節の内容を結論の前提として表している。例えば、アキラの合格について話者が特定の立場を示さない状況の発話としては、(44a) の「ば」節、(44b) の「たら」節が適切である。一方、(44c) はアキラの合格の可能性を話者が前提した場合の話者の結論としての発話で、前提とするに足る先行談話情報などがある状況で可能となる。

- (44) a. アキラが入学試験に受かっていれば、家族みんなが喜んだだろう。  
 b. アキラが入学試験に受かっていたら、家族みんなが喜んだだろう。  
 c. アキラが入学試験に受かった [なら / のなら]、家族みんなが喜んだだろう。

非過去時制の「なら / のなら」節では、動作動詞が未来を表し、「ば」節・「たら」節では事態が帰結節が言及する時まで既に起こっていることが仮定されるという点で違いがあるが、過去、完了形を用いた条件節ではその違いが無いことになる。上の (44) に見られる「ば」節・「たら」節に対する「なら / のなら」節の違いによっても、条件節が表す前提に話者の認識に関わる事が示される。

「なら / のなら」節では、非過去形の動作動詞は、事態が起こったことを仮定するのではなく、未来に事態が起こる可能性を前提として表す点において「ば」節・「たら」節と異なることを上で述べたが、「ば」節・「たら」節においても、仮定を表す「～とす」(時制節を選択する補文標識「と」+す(る))の補文として非過去の時制節を埋め込むことにより、未来に起こり得る事態を仮定する事ができる。



- (45) a. 明日の試合でエンジェルスが勝つとすれば、オオタニの活躍のおかげだろう。  
 b. 明日の試合でエンジェルスが勝つとしたら、オオタニの活躍のおかげだろう。

(45a) (45b) の「ば」節・「たら」節による条件文に対して、(46) の「なら / のなら」節による文が容認可能と判断される状況は限られる。

- (46) ?? 明日の試合でエンジェルスが勝つ [ なら / のなら ], オオタニの活躍のおかげだろう。

(45a) (45b) では、明日の試合での勝利の可能性について中立的に仮定しているが、(46) では、エンジェルスが勝つという命題を前提にしている。例えば、エンジェルスが勝利することを予測する発言が対話相手から先行してあった場合は、相手のその主張を前提にした(46)は容認可能である。?? は、容認の可否がこのような談話における制約を受けることを表している。(45a) (45b) にはこのような制約は受けない。

次の(47)においても、埋め込まれた時制節により未来の可能性を表す「ば」節・「たら」節と「なら / のなら」節による条件文の違いが見られる。

- (47) a. この堤防が決壊するとすれば、大雨が止まらずに半月降り続いた時だろう。  
 b. この堤防が決壊としたら、大雨が止まらずに半月降り続いた時だろう。  
 c. \* この堤防が決壊する [ なら / のなら ], 大雨が止まらずに半月降り続いた時だろう。

帰結節の内容から、これらの文の意図される解釈は、条件節で表す事態が起り得る状況についての予測と考えるのが妥当であろう。しかし、(47c) では、堤防が決壊する可能性について予測するのではなく、決壊することを前提にした解釈となり、決壊がどの状況であり得るかを予測する帰結節の内容と一貫性がない。「なら / のなら」節と同じ時制節を「ば」節・「たら」節が含んでいても違いがある事がわかる。

また、次の例は、時制節の埋め込みによって「ば」節・「なら」節が未来の可能性を仮定する場合、帰結節で話者の意図や計画を表す文は不適格である事を示している。

- (48) a \* 彼が私の話を聞くとすれば、喜んで話しましょう。  
       b.??? 彼が私の話を聞くとしたら、喜んで話しましょう。  
       c. 彼が私の話を聞く [ なら / のなら ], 喜んで話しましょう。

(48ab) と可能な (45ab) を比較すると、「ば」節・「たら」節が埋め込まれた時制節によって未来の可能性が表される場合であっても、その帰結節は仮定に基づく予測を表す、予測的条件文の性質を示していると言える。一方、「なら / のなら」節を用いて可能な文である (48c) は、話者が前提に基づき結論として自らの意思を表明している。話者による結論の中には未来の予測に関わるものもありうるため、帰結節からは予測的条件文との違いが判別しにくいこともあるが、「なら / のなら」節では話者の認識による前提の関与する点が特徴的である。以上の考察により、時制性に関わらず、「なら / のなら」節は、話者の認識に関わることに於いて「ば」節・「たら」節と異なることが示される。

### 3. 4 「なら / のなら」節の構造と「話者」

前節で示された時制節性だけでは捉えられない条件節間の違いは、話者の発話時における認識といった語用論との接点に関わる仕組みが「なら / のなら」節にのみ含まれると考えることによって説明することができる。論理的な因果関係だけでなく話者による予測や認識が関わっていることは、if 節に法助動詞の will が現れる (39) のような英語の例でも見られるが、このような epistemic conditional の条件節について、Haegeman (2003) では、Rizzi (1997) による Split CP を踏まえた節周辺部に含まれる機能範疇が event conditional とは異なる構造が提案されている<sup>15</sup>。

- (49) a. Event-conditional clause: Subordinator>Fin  
       b. Epistemic-conditional clause: Subordinator>Force>Top\*>Focus>Top\*>Fin  
       c. Root clause: Force>Top\*>Focus>Top\*>Fin

(49) に示されるように、Haegeman は epistemic conditional の構造は、Subordinator (接続詞) を含む点を除いて、主節に等しいものと主張している。日本語においても従属節である「なら / のなら」節が主節からは独立して発話時起点で時の解釈がされることは、主節と同じように Force を含む構造を想定する根拠の 1 つと考えられる。「ば」節・「たら」節と周辺部の構造の違いに関り、本稿で示す事ができることは限られているが、いくつかを挙げる。

(49) に対応するような構造的な違いが「ば」節・「たら」節と「なら / のなら」節にあると仮定すると、話者の認識に関わる蓋然性を表す副詞の分布がこれらの条件節の間で違う事が予想される。

- (50) a. タカシがおそらく疲れている [ なら / のなら ], 試合は延期するべきだろう。  
 b. \* タカシがおそらく疲れていたら, 試合は延期するべきだろう。  
 b'. タカシが疲れていたら, 試合は延期するべきだろう。  
 c. \* タカシがおそらく疲れていれば, 試合は延期するべきだろう。  
 c'. タカシが疲れていれば, 試合は延期するべきだろう。

(50a) は先行する談話で対話の相手から、例えば「大事な試合の前だというのにタカシは元気がないよ。猛暑でおそらく疲れが溜まっているのだろう。」のような発言があった場合、その発言を前提とした発話として容認可能だと考える。この場合、「おそらく」により修飾された「なら / のなら」節は、タカシが疲れている可能性が高いことを前提として提示し、蓋然性についての話者の認識を前提としている<sup>16</sup>。(50b) (50c) では、「たら」節、「ば」節が「おそらく」を含むことができないことを示している。例の多様性のために次の (51) では、条件節に動作動詞が用いられ、蓋然性についての話者の認識を表す別の副詞「たぶん」が用いられているが、同様の違いが観察される。

- (51) a. 自民党がたぶん圧勝するなら, 内閣の顔ぶれは変わらないだろう。  
 b. \* 自民党がたぶん圧勝したら, 内閣の顔ぶれは変わらないだろう。  
 c. \* 自民党がたぶん圧勝すれば, 内閣の顔ぶれは変わらないだろう。

次の例のような、希望や許可、助言などを表す文で条件節を用いられる場合も、「ば」節・「たら」節と「なら / のなら」節では文意が異なる。このような例においても、話者の認識についての条件節の違いが関わっていると考えられる。

- (52) a. 君がこの本を読んだら良い。  
 b. 君がこの本を読めば良い。  
 c. 君がこの本を読む [ なら / のなら ] 良い。

(52a)(52b) では「ば」節、「たら」節が述語「良い」に対するトピック(話題)のように解釈され、それぞれの条件節が表す行為について「良い」と述べられているのに対し、(52c) で「良い」が受けているのは、「なら / のなら」節が表す行為そのものではない。(52c) では明示されていない何事かを許可したり受け入れる前提条件として条件節の内容を提示していると解釈される。聞き手に特定の書籍を読むことを勧めたり、許可する事が目的の発話としては、(52a)(52b) は可能だが、(52c) は不適格である。この例でも主節に対する関係が「なら / のなら」節の場合と「ば」節・「たら」節の場合で異なっていることを表していると考えられ、「なら / のなら」節においては結論を導くために話者により設定される前提として、話者の認識が関わることを示している。

さらに、補文標識「と」+ 思います / 考えます / 存じます、などに条件節のみが先行する事がしばしばある。以下の例のように、このような例でも「ば」節・「たら」節のみが許容され、「なら / のなら」節は不可となる。

- (52) a. ご不明な点につきましては、ご連絡いただければと思います。  
 b. ご不明な点につきましては、ご連絡いただけたらと思います。  
 c. \* ご不明な点につきましては、ご連絡いただける [ なら / のなら ] と思います。

(53a)(53b) のような場合は、帰結節は社会通念上予測可能な内容であるために省略されていると考えられる。「ば」節・「たら」節による条件文では、条件節が表す事態の実現により予測される事態が帰結節で表される関係のため、条件節から、礼儀上の習慣により内容が予測される帰結節は

省略可能となる。一方、「なら / のなら」節と帰結節の関係は異なり、前提をもとに推論される結論は省略できない。次の例のように、帰結節が明示されれば、「なら / のなら」節による条件文が「と」節に起こる事ができる。

- (54) ご不明な点につきましては、ご連絡いただける[なら / のなら]すぐに対応できると思います。

「なら / のなら」節は話者の認識を含むことにより、「ば」節・「たら」節の場合とは条件文全体における帰結節との関係が異なることを示す例を見てきた。Haegeman (2003) が英語の epistemic conditional に対して提案されているように、機能範疇 ForceP が「なら / のなら」節に含まれることで、話者の座標が節構造に反映され则认为することは一定の妥当性があると考えられるが、構造分析についてはそれを示すさらなるデータと検証が必要であろう。

#### 4. 結論

日本語条件文の前件である条件節「～ば」節, 「～たら」節, 「～なら / のなら」節のうち, 「～なら / のなら」節が時制節であることだけではなく, 話者による想定が前提として提示され, 話者の認識が関与する点において他の条件節と異なる。「ば」節・「たら」節と「なら / のなら」節の違いは, 有田 (2007) が主張する命題の既定性ではなく, 仮定の世界において事態が成立したことを表すか, 話者の現実の時 (発話時) における話者の認識を前提として表すものであるかの違いであり, この違いは時制節性の違いから直接説明可能でないことは, 前提条件を表す述語とともに時制節補文を含む「ば」節・「たら」節においても「なら / のなら」節との違いが維持されることによっても示される。英語の条件文では, event conditional と epistemic conditional の違いが if 節の動詞形態の違いとして現れることがあるが, 同様の違いが「～ば」 / 「～たら」・「～なら / のなら」の条件形式の違いとして表され则认为られる。

「ば」節は, 「たら (ば)」 / 「なら (ば) / のなら (ば)」のように3つの条件形式に共通する要素と考えられる「ば」が動詞未然形に接続した非時制節の単純な構造であるが, 「たら」節, 「なら / のなら」節の構造について,

本稿では、「なら / のなら」節に話者の認識に関わる機能範疇 ForceP が含まれる可能性の指摘にとどめた。「たら」節の「た」が時制素性はないが法制的素性をもつことは、「明日雨が降ったなら / のなら」の例のように「なら / のなら」節で動作動詞のタ形が過去を表さない現象とも関わっていると考えられ、MoodP の関与も示唆される。

## 注

- 1 Dancygier (1998) では、(2) と同じ時制形式を用いて、(i) (ii) ではそれぞれ、現在、未来が表されることが示されている。

i. If your mother had been here now, she would have been in tears. (ibid. p.33 (13))

ii. If John had come to the party tomorrow, he would have met you. (ibid. p.33 (14))

イタリア語の反事実的条文においても類似の現象が観察される。

Se fossi donna no so che mestiere farei.

se be- 接続法半過去 do+ 条件法

もし女性だったら、私は何の仕事をしているのだろう。

Se ieri avessi avuto tempo sarei andato al cinema.

se have- 接続法半過去 go+ 条件法過去

昨日もし時間があつたら映画に行ったのに。

時制形式と指示される時間には必ずしも一致はなく、同じく se 接続法過去, 条件法過去の形式で、現在や未来について時間的余裕があることについての話者の心理的な距離を表していると考えられる。

Se oggi avessi avuto tempo sarei andato al cinema.

if today (I) have+ 接続法半過去 had time (I) be+ 条件法 gone to cinema

Se domani avessi avuto tempo sarei andato al cinema.

if tomorrow (I) have+ 接続法半過去 had time (I) be+ 条件法 gone to cinema

- 2 例 えば, 'The future marker is replaced by a present tense in conditional clauses.' (McCawley 1971) のように説明される。Jespersen (1909-49) や Leech (1971) では、条件節に現れる will は時間的な意味はなく、意志 (volition) の意味しかないと言われている。これに対し、Close (1980) では、if 節で will が意思以外の意味で用いられることを示している。
- 3 Close によると (5) の will は「意志」を表す will ではなく、強勢が置かれた次の文の will (won't) が明らかに「意志」を表しているのに対比される。  
If he won't get here before nine, we shall have to terminate his employment.
- 4 主節にある副詞の作用域の範囲、no one のような数量詞と代名詞の束縛関係における違いに基づいた議論が行われている。

- 5 Dancygier (1989) では、未来の事態を表す条件節で現在時制形式が用いられることについて、法助動詞 (will) の削除、加えて、反現実の条件文において、現実の事態を表すよりも過去に遡った時制形式が用いられる現象を backshifting 「時制後退」として捉えている。
- 6 「のなら」は時制節をとる補文標識「の」+「なら」に分析される。「なら」節では補文標識が音声形式で実現されない、あるいは、その部分の構造が縮小された可能性などが考えられるが、本稿では、条件節と帰結節の意味的、構造的関係の点から「なら」節と「のなら」節の共通部分に焦点を当て、「ば」節・「たら」節と対照するものとして分析する。口語では、「帰ってきたんなら、知っているんなら」のように、音縮小により、「のなら」はしばしば「んなら」と発音され、「なら」との区別が明確に感じられない場合もある。  
ただし、有田 (2007) で指摘されるように「なら」「のなら」には次のような違いが見られる。(cf. 注 6)
  - i) 明日もし雨が降ったなら、茶会には誰も来ないだろう。
  - ii) \* 明日もし雨が降ったのなら、茶会には誰も来ないだろう。
 また、佐藤 (2011) では、主節のトピックよりも低い位置に「なら」節、「のなら」節が生じる場合の容認性の違いを指摘し、構造上の違いを主張している。
  - iii) 消費税増税は、田中氏が首相になったなら、与党が提案するだろう。
  - iv) \* 消費税増税は、田中氏が首相になったのなら、与党が提案するだろう。
 (iv) のような文は、主節のトピックと「のなら」節の間にやや長いポーズがおかれ、「のなら」節が挿入句的な特徴を持つ場合にのみ許容されると指摘されている。
- 7 標準的な方言では現代はほぼ用いられないと思われる。文語体では、「たら」(完了の助動詞「たり」の未然形)+「ば」が用いられる。(例)「つばくらめの巣くひたらば告げよ」『竹取物語』
- 8 「なら」節では、未実現の未来の事態を「明日もし雨が降ったなら、茶会には誰も来ないだろう。」のように、動詞のタ形によって表すことが可能である。このような場合の ta は、時制の値をもたない仮定法の形態素であると考えられる。  
仮定法の形態素を持つ動詞は、時制節とは異なる節を形成すると考えると、時制節に対する標識標識「の」を含む「のなら」節には起こらないことになる。  
\* 明日もし雨が降ったのなら、茶会には誰も来ないだろう。
- 9 有田 (2007) では、時制節非時制節の間に、時制形式の交替はないが、主節と異なる主格主語をもつ副詞節を不完全時制節として区別し、この観点から「なら / のなら」節に完全時制節、「ば」節、「たら」節に不完全時制節の用語を用いている。本稿では、上記のような異なるタイプの副詞節の節周辺部にはテンス以外にも異なる機能範疇が関与していることを前提に、副詞節における音形のある主語の表出については、時制性のみに直接関係づけないことから、時制に関する形態と意味の観点から「なら / のなら」節に時制節、「ば」節、「たら」節に非時制節の用語を用いる。
- 10 有田 (2007) では、スケジュールに組み込まれている事柄など、実現していない未来の事態であっても話者が実現を見込んでいる事柄については、既定が見込まれる言明として広義に既定として既定命題に含めて扱われている。



- 11 有田 (2007) では日本語の条件文の異なる種類について、次のように記述されている。
  - a. 予測的条件文の条件節は不完全時制節をとる条件形式「ば」「たら」によって表される。「なら」が不完全時制節をとる場合、制約はあるが予測的条件文に現れる。
  - b. 認識的条件文の完全時制節をとる条件形式「なら」「のなら」か、状態述語あるいは動作性述語の状態形をとる「ば」「たら」によって表される。
  - c. 反事実的条件文の条件節は完全時制節をとる「なら」か状態述語あるいは状態形をとる「ば」「たら」によって表される。
- 12 「ば」節、「たら」節の動詞を完了形にすることによって、主節が表す時間が過去か非過去かに関わらず、それよりも前の時間に起こった事態であることを表すこともできる。
 

直樹は朝早くに家を出ていれば、試験に間に合うはずだ。  
 直樹は朝早くに家を出ていれば、試験に間に合ったはずだ。  
 (明日までに) 招待状を受け取っていたら、真知子は演奏会に来るだろう。  
 招待状を受け取っていたら、真知子は演奏会に来ただろう。
- 13 上記 (注 8) にあるように、「なら / のなら」節で動作動詞の過去形 (タ形) により未実現の事態を表す事が可能だが、そのような場合には、その事態が起こり得る可能性を前提にする意味はなく、「ば」節・「たら」節と同様に、その事態が実現したことを前提にする意味のみが可能であることから、「なら / のなら」節の動作動詞の過去 / 非過去形が自由変異ではない事がわかる。
  - i) 彼が改心したなら、私は彼を許すかもしれない。
  - ii) 杉田氏が再び総裁に立候補したなら、株価は暴落するだろう。
- 14 Palmer (1974) では 2 つの解釈が次のように表されている。
  - (i) If it is likely that, with my will in its present form, he'll be left destitute, I'll change it in his favor.
  - (ii) If, by changing my will, I can leave him penniless, then I will cut him out of it.
 Close (1980) は、Jespersen (1909-49) で示される、if 節で用いられる will は意志を表すとする見解により、(iii) If he is willing to live in absolute poverty after I die, I will leave my money to someone else. を可能な解釈の 1 つとして挙げている。
- 15 Haegeman (2003: 335) では条件文に限らず、副詞節一般の関わる構造的違いとして示されている。(a) は Event Conditional を含む Central adverbials, (b) は Epistemic conditional を含む Peripheral adverbials の構造として提示されている。
- 16 話者が結論を導き出すための前提「なら / のなら」節は、既定の事実である必要はなく、蓋然性に言及した命題が前提となることも可能と考える。荷物の配達がおそらく 3 時ごろになると予告された状況で、本著者の内省では (i) の発話が可能だと判断される。
  - i) 荷物がおそらく 3 時に届く [なら / のなら]、それまでは家に居ることにするよ。



## References

- 有田節子 2007. 『日本語条件文と時制節性』 くろしお出版
- 佐藤裕美 2011. 「日本語条件節における時制, モダリティ, 話者」 武内道子・佐藤裕美 (編) 『発話と文のモダリティ』 ひつじ書房
- Akatsuka, N. 1992. Japanese Modals are Conditionals. In D. Brentari, G.N. Lardon and L. A. MacLeod (eds), *The Joy of Grammar*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Co.
- Cinque, G. 1999: *Adverbs and Functional Heads: A Cross-linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Close, R.A. 1980: Will in if- clauses. In S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (eds), *Studies in English Linguistics*. London: Longman.
- Dancygier, B. 1998. *Conditionals and prediction: Time, knowledge and causation in conditional constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haegeman, L. 2001a: Anchoring to speaker and the structure of CP. Ms. Universite ´ Charles de Gaulle, Lille III.
- Kuno, S. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Leech, G. 1971. *Meaning and the English Verb*. London: Longmans.
- McCawley, J. 1971. Tense and time reference in English. In C. J. Filmore and D. T. Langendoen (eds), *Studies in Linguistic Semantics*. New York: Holt, Rinehart and Winston. 96–113.
- Palmer, F. 1974: *The English Verb*. London: Longman.
- Rizzi, L. 1997: The fine structure of the left periphery. Haegeman, L (ed.), *Elements of Grammar*. Dordrecht: Kluwer, 289–330.
- Sweetser, E.E. 1984: Semantic Structure and Semantic Change: a Cognitive Linguistic Study of Modality, Perception, Speech Acts and Logical Relations. Ph. D. Diss. Berkely University of California.
- Thompson, E. 1994: *The syntax and semantics of temporal adjunct clauses*. Studies in the Linguistic Sciences, 24.